

日本学術会議会員候補者の情報提供について

2005年1月14日

日本学術会議会員 池内 了

「天文月報」2004年9月号でご報告しましたように、日本学術会議は2005年10月1日より新しい体制に改変されることになりました。その改変に伴って、日本学術会議会員の推薦の方式も変更されることになり、すでにその準備のための情報収集が始まっています。以下では、この経緯をまとめ、会員諸氏のご理解をお願いしたいと思います。

日本学術会議会員の選出に関しては、これまで、「天文学」分野として日本天文学会が唯一の推薦母体となっており、天文学会正会員の選挙によって会員候補者を選出し、推薦委員会へ推薦するという手続きをとってきました。

ところが、日本学術会議法の改正により、新しく発足する日本学術会議においては会員の推薦方式 (co-optation) によって新会員を選出することになりました。しかし、第1回の会員選出のみに限って、日本学術会議会員選考委員会（以下、選考委員会と略す）が設けられ、その選考委員会が各学協会から情報を収集してから選出し内閣総理大臣に会員候補者を推薦する、という手続きをとることになっています。

その手続きの一環として、選考委員会から日本天文学会宛に会員候補者の情報を提供するよう依頼がありました。選考委員会が会員を推薦するに当たって、会員候補者のデータを収集することが目的であったと思われます。その情報提供においては、会員候補者を8名推薦すること、その候補者には産業人・実務家・若手研究者・女性研究者の合計（実数）が4名以上であること、女性研究者が2名以上、地方在住者が4名以上あること、

との付帯条件が付いておりました。

そこで、日本学術会議の現会員である池内が日本天文学会の杉山 直庶務理事と相談した結果、従来の2名の推薦（実質的に1位の者が会員候補者になる）とは異なり8名の推薦であること、今回だけの措置であること、時期が迫っていて急を要することから、従来のような日本天文学会正会員による選挙は行わず、理事および評議員による選挙を行うことが適当ではないかとの結論を得ました。持ち回りの評議員会にお諮りしたところ承認されましたので、特別措置として理事および評議員での選挙を行うこととなりました。これまで、科学研究費補助金の審査委員においてほぼ同数の候補者を推薦するにあたって、理事および評議員の投票を行ってきたことを踏襲したのです。

この選挙は2004年11月に実施され、まず得票数の順位に従って上位者を決定した上で、女性研究者、地方在住者、若手研究者、という付帯条件を考慮して上位から推薦候補者を決定することにしました。その結果は以下のとおりで、得票数の多い順に整理番号を付して選考委員会に情報提供を行いました。

海部宣男	1 (整理番号)
加藤万里子	2
小山勝二	3
奥村幸子	4
福井康雄	5
舞原俊憲	6
杉山 直	7
望月優子	8

なお、付帯条件のために得票数が上位であるに

もかかわらず推薦することができなかった人が複数おられたことに関して、日本天文学会理事長の松田卓也から選考委員長の吉川弘之氏宛の要望書

を提出しました。その文章を以下に添付しておきます。

平成 16 年 12 月 20 日

日本学術会議会員候補者選考委員会
委員長 吉川弘之様

社団法人日本天文学会
理事長 松田卓也

日本学術会議会員候補者に関する情報提供について

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、かねてより社団法人日本天文学会（以下天文学会）にご依頼いただきました日本学術会議会員候補者に関する情報提供について、8名の候補者を推薦いたしますとともに、選考委員会にお願いがございます。

天文学会といたしましては、できうる限り広い範囲から公平かつ民主的に候補者を選ぶ、という観点から、理事および評議員 40 名による選挙を行い、その得票に基づいて候補者を選びました。その過程で生じた問題点に関してのお願いであります。貴選考委員会からいただいた推薦の留意事項、条件といたしまして、多様な会員構成とするため、産業人・実務家、若手研究者、女性研究者、地方在住者である会員候補者についての情報提供に十分な配慮を、ということでありました。大変もったもな条件ではありますが、この条件を、厳密に数値化されて人数を指定されたことから、とても困った事態が持ち上がったのです。

天文学会で行った選挙結果をその数値化した条件に照らしますと、上記の条件に合わない、すなわち「50歳以上で東京在住の男性候補者」に対して、非常に強く排除する結果となってしまい、非常に困惑いたしております。具体的には得票 1 位、3 位、4 位、5 位の方が、この条件に当てはまってしまう、結果としては得票 1 位の方のみしか 8 名の推薦枠に入れることができませんでした。

このことは条件の数値化の厳密さから、避けがたいことでもあります。天文学会については、8名のうち、4名は「産業人・実務家、若手研究者、女性研究者の合計が 4 名以上」で「地方在住者の合計が 4 名以上」となっております。恣意的に「産業人・実務家、若手研究者、女性研究者」で選ばれた方々が「地方在住」であるように選択しないかぎり、「50歳以上で東京在住の男性候補者」が今回のように 1 名しか推薦できない、という事態が生じることは当然といえましょう。今回はたまたま女性研究者 1 名が川崎市（東京都のすぐ隣ですが）に在住していたため、地方と数えることができたので、得票 1 位を推薦できましたが、もしこの女性研究者が東京在住であれば、「50歳以上で東京在住の男性候補者」をまったく選ぶことができない、という事態になっているところでした。

貴選考委員会といたしましても、学術会議会員としては、もとより高い見識をもった研究者を求めていることと信じております。今回の非常に厳密な（行き過ぎた）留意事項の数値化によって、天文学会としては、見識の高い候補者を推薦できなくなってしまったことは、大変残念な事態でありますとともに、貴選考委員会としても想定外の事態ではないかと想像いたします。

そこで異例のことではございますが、天文学会理事長といたしまして、得票の特に高かった、そして、やむなく条件によりまして候補に残すことができなかった方、2 名の名前をここに挙げさせていただきます。よろしくご配慮いただけましたらば、幸いです。（以下略）